

英国における「ドイツのトゥルネン」 ——ある文化伝播の挫折

クリスティアーネ・アイゼンベルク* 著
有賀 郁敏** 訳

【訳者付記】

本稿は、クリスティアーネ・アイゼンベルク (Christiane Eisenberg) 氏の論文, “Deutsches Turnen” in England: Das Scheitern eines Kulturtransfers の翻訳である。

本論文は、B. J. ヴェント教授の満65歳を記念して編まれた著作 (F. オットー／T. シュルツ編『イギリス連合王国とドイツ——19, 20世紀における社会的, 文化的, 政治的諸関係』[F. Otto/T. Schulz (Hg.), *Großbritannien und Deutschland. Gesellschaftliche, kulturelle und politische Beziehungen im 19. und 20. Jahrhundert*, Rheinfelden 1999.]) に掲載された (当論文は13-32ページ)。ちなみにアイゼンベルク氏は、当論文を微修正した英語論文を2007年に発表している (“German Gymnastics” in Britain, or the Failure of Cultural Transfer, in: Stefan Manz/Margrit Schulte Beerbühl/John R. Davis (Hg.), *Migration and Transfer from Germany to Britain 1660-1914*, München 2007, S. 131-146.)。後者は、翻訳依頼の過程で著者から情報提供されたものであるが、考察の対象を17世紀から開始しているものの、内容そして当然のことながら使用されている文献の類もほぼ一致しており、2つの論文は基本的に同種のもので理解してよからう。

アイゼンベルク氏はドイツ・フンボルト大学英国研究センター教授としてドイツのみならず国際的な舞台で活躍している。訳者はほぼ10年前に本誌において氏の論文を翻訳し、訳者解説の中で氏の論文の意義ならびに著者の簡単な経歴を記した (「フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーン——トゥルネンの『考案者』」(C. Eisenberg, Friedrich Ludwig Jahn- “Erfinder” des Turnens, in: *Sportwissenschaft*, 30 Jg., H. 2, 2000: 市井吉興氏との共訳), (訳者解説)「「フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーン——トゥルネンの『考案者』」の翻訳にあたって」『立命館産業社会論集』第37巻, 第1号, 2001年, 147-167ページ) が、歴史学や社会学などの人文社会科学の成果を手がかりに、市民社会、国民国家そしてスポーツ文化を分析する氏の秀逸した研究力量は今も健在である。

論文の注でも触れられているように、本論文の内容は同時期に出版された氏の代表作、『「英国スポーツ」とドイツ市民の社会史1800—1939年』(“English sports” und deutsche Bürger. Eine Gesellschaftsgeschichte 1800-1939, Paderborn 1999) と深く関係している。当文献は、市民社会、市民層、市民性といった市民に関する鍵概念を用いながら、ドイツと英国において展開するスポーツ、スポーツ協会(クラブ)などの機能をていねいに分析している。とはいえ、ドイツと英国の文化交流、とりわけドイツから英国への文化伝播の様相に関しては必ずしも十全な叙述となっておらず、本論文

* フンボルト大学英国研究センター教授

** 立命館大学産業社会学部教授

がそうした欠落部分を補う役割を果たしているといえるだろう。

本論文のタイトルからも、すでに論文の顛末が推察できるように、ドイツの身体文化、「体操」(Gymnastik)と「トゥルネン」(Turnen)は、その英国への伝播の過程で困難を極めた。日本では、この間、成田十次郎教授をはじめ気鋭の研究者が19、20世紀転換期に顕在化する「トゥルネン・スポーツ抗争」をめぐる実証研究に取り組んできたが、それらはもっぱらドイツ側の視点（史料）による研究成果であった。それに対して本論文は同時代のドイツの政治、社会状況を見すえながらも、主に19世紀後半以降の英国社会を軸にトゥルネンの伝播のありよう＝「挫折」を論じている。そこでは伝播の実態がスポーツ史、教育史、階級論、市民社会論、文化理論、ジェンダー論などといった複眼的な視点を通じて語られており、このようなパースペクティブは、長年、ドイツ及び英国の市民層、市民社会研究に取り組んできた著者ならではの真骨頂といえるだろう。

翻訳に際しては、キーワードとなる“Gymnastik”と“Turnen”をそれぞれ「体操」「トゥルネン」と訳している（ただし、すでに訳書（成田十次郎訳）が存在し学界でも流通しているグーツムーツの著作だけは『青少年の体育』とした）。両者の区別と関連をここで説明することは不可能だが、少なくとも歴史にける両者の差異を示す観点から、そのように表記している。

最後に、本論文を翻訳し、本書へ掲載したいという訳者の願いに快く応じてくださったアイゼンベルク教授に対し、心から感謝申し上げたい。

有賀郁敏

1. 問題設定

19世紀前半に「英国のスポーツ」の多く、とりわけ競馬、サッカー、陸上競技、ローンテニスとホッケーが英国人によってドイツ帝国へ紹介され、程なくして若いドイツ人たちによって普及された。第1次世界大戦が勃発した際に「スポーツ」は各種目の活動にとっての中心的な要素となったばかりか、広く世間に流通し、また政治的な関心もひいた。もし、第1次大戦が勃発しなかったならば1916年にオリンピック競技会がベルリンで開催されていた。

「英国のスポーツ」(English sports)の効果的な文化伝播は「ドイツのトゥルネン」(Deutsches Turnen)を犠牲にして進められた。というのは、新たな余暇の楽しみは、1868年以降、ドイツトゥルナー連盟(Deutscher Turnerschaft: DT)に集ったトゥルネン協会から会員、公的関心そして国家からの助成を奪い

取ったからである。この経験の反動において、またスポーツにとって根本的な競争原理を拒否したがゆえに、DTの幹部たちは英国の輸入品に対して必死の「文化闘争」を仕掛けたのであった。このことは、スポーツにとって両義的な結果をともなった。一方でトゥルネン運動による対抗が、政治とメディアにおける付加的な価値をスポーツにもたらし、結果としてスポーツの急激な普及に貢献した。しかし、他方で政治的な抑圧の下、次のような効果と妥協することにもなった。つまり、トゥルナーの集団的行進とトゥルナー文化に内在する他の反スポーツ的要素を、成立したスポーツ運動が早々に引き継いだことである¹⁾。

ドイツから英国へ、という逆の方向で「ドイツのトゥルネン」は文化伝播の対象となった。しかしながら、この場合、どちらかという調和的な経過のみならず、輸入品にとって十分な成果をもたらさない、また英国文化にとって非効果的な経過も生まれた。確かに1860年代以

降、器械体操は英国においてスポーツ種目の一つとして発展し続けたが、しかしそれは同時代あるいは後の時代の人気度の面で、いわば「とるにたらない」存在として位置づけられた。つまり、トゥルネンはクリケット、サッカー、陸上競技、ボート、競馬などに完敗したのである。学校もトゥルネンを熱心に受け入れようとはしなかった。また、ドイツでは非常に好まれ、軍隊を模範に組織化されたトゥルナーの行進は、英国では音楽をともなった「レクリエーション練習」（recreational drill）の形式において受容された²⁾。

一方で、こうした英国におけるトゥルネンの用心深い、一風かわった受容は相互の文化交流の欠落ゆえに起きたという解釈には説明が必要である。この場合、従前の研究でよく引き合いに出される英国人の情報不足（外国語の知識不足、翻訳の欠如など）は³⁾、理由として正当化できない。なぜならば、トゥルネンはスポーツと同様、身体、知覚そして象徴的な相互作用に関して経験のないし直接的な存在であり、またこの論文で触れられるとおり、顕著な成果をとまってトゥルネンが輸出された他のヨーロッパ諸国、アメリカ合衆国そしてラテンアメリカと同様のコミュニケーションの機会を英国でも得ていたはずだからである⁴⁾。

他方で、「動機の非対称」（ルードルフ・ムース）——この場合、「文化的刻印力の非対称」である——、つまり「英国のスポーツ」がドイツの文化状況を持続的に変えた一方で、「ドイツのトゥルネン」は英国において気づかれぬままであり、また関心のあるところでもトゥルネンはいわば「遅延することなしに」現存する文化に同化されたという見解も説明を要する⁵⁾。

本稿では英国へ向けたトゥルネンの文化伝播

の失敗を歴史的に考察することで、この非対称の解明を試みたい。考察の関心は、さしあたりトゥルネン・スポーツ史的なものに向けられていない。また、それと照応して文化伝播の2つの対象、すなわち「英国のスポーツ」と「ドイツのトゥルネン」における構造的特質に関しても簡単にしか扱わない。考察の目的は、むしろ具体的な事例をめぐり、19世紀そして20世紀初頭におけるドイツから英国への文化伝播の一般的な問題を検討することにある。すなわち、誰がドイツの文化、この場合、「ドイツのトゥルネン」を英国へ知らせたのか。どのようなメディアが投入されたのか。どのようなターゲット・グループ、伝達者が言及されたのか。いつ、どこでそれらが現れたのか。どのような状況下、そしていかなる目的でなされたのか。どのような困難が立ちちはだかったのか、といった問題群である。

同時に本研究は、数年来なされてきた近代への「英国の特殊な道」（englischer Sonderweg）に関する論争の貢献でもある。この論争では、通常、17世紀末から19世紀初頭における君主権力の制限、議会制度の創設、そして他のヨーロッパではそうとう後になってから始まる産業化、といった類の近代化過程がテーマ化されている⁶⁾。それゆえ、これまでのところ19世紀後半そして20世紀は特殊の道論争の対象としてあまり論じられてこなかった。せいぜいのところ、しばしば議論の対象となる「衰退した」イギリス連合王国の現象——ヨーロッパ大陸における飛躍と平行して多くの地域で発生し、幾つかの地域ではパイオニアに特別な役割を担わせる——が問題とされる際に、この論争が触れられるだけである⁷⁾。全体としてみれば、ヨーロッパ大陸諸国の後発の近代化、ならびにそれと

ともに現れた国際レベルのコミュニケーションの濃密化が、長期にわたり「英国の特殊な道」の「整理」をもたらしたという推察が支配的であるように思われる。しかし、この推察は経験的な自明性と矛盾している（英国政府のヨーロッパ懐疑を想起させる）。それだけではない。新たな文化社会学とグローバリズム研究が指摘しているように理論的にも確証できない⁸⁾。こうした理論を援用すれば、その中で外部からの様々な影響が近代化過程の流れに沿って生み出された他国との「隔たり」を固定化し、再生産を促すような状況を徹底して考察できるのである。以下に続く挫折した英国へのトゥルネンの文化伝播に関する考察は、こうした関係を具体的な事例で確認する試論として理解されてもよいだろう。

しかし考察を始めるに際して、「ドイツのトゥルネン」の出現と変化に富んだ発展について簡単に説明しておこう。なぜならば、それに関する理解は、20世紀末のドイツの読者にとって、もはや前提とはいえないからである。

2. 体操とトゥルネンの成立

そもそもトゥルネンは「トゥルネンの父・ヤーン」によって発見されたのではない。かれが1810年にある種の身体運動をプロイセンの若者に紹介し始めたとき、かれはすでに18世紀末に複数の啓蒙的な教育者、いわゆる汎愛派の手によって発展され練り上げられた体操体系を参照していた⁹⁾。

この体操の中核的要素はバランスと「男らしさ」の表現としてのよき身体姿勢を保った直立の前進歩行であった。この運動は形式からすれば、初期近代の貴族の霊操に由来していた。し

かし、それは、汎愛派教育学の文脈の中で、持ち運ぶ、攀じ登るそして飛び跳ねるといった他の運動と結びつき、純粹に市民的教育目標を考慮して紹介された。このような意図は、とりわけおそらく最も影響力のあった汎愛派教育者、ヨーハン・クリストフ・フリードリヒ・グーツムーツ（Johann Christoph Friedrich GutsMuths：1759-1839）の文献の中で明らかになった。かれはデッサウの「汎愛施設」、すなわち市民（そして貴族）の青年層のためのエリート寄宿学校で活動し、そして『青少年の体育』（Gymnastik für die Jugend）（1793年、第2版は1804年）のタイトルで、この領域の最初の教本を出版した。グーツムーツは以下の2つの動因において体操を結びつけた。第1に、体操は若い人々に職業生活に対する準備をさせるべきであった。第2に、体操はかれらに市民的な業績の考え方を理解させるべきであった。宮廷の人々が常に精巧でエレガントな運動を互いに凌駕しようと試みることによって、君主の愛顧を保持している一方で、若い市民の運動は一直線に進むべきであり、また身体を強化すべきであった（「身体の労働」）。そしてこの運動は個々人の進歩の証が可視化できるよう、定量化されなくてはならなかった。

グーツムーツによって組織化された運動の場は、若き教育家、フリードリヒ・ルートヴィヒ・ヤーン（Friedrich Ludwig Jahn）の訪問をきっかけに世間に知られるところとなった。ヤーンが1807年にナポレオンに対するプロイセンの壊滅的敗北後、密偵そしてアジテーターとして国民意識の強化とナポレオンに対する反乱の拡大のための運動を組織するために、プロイセンの改革者シュタインとハルデンベルクに雇われたとき、かれは汎愛派によって推奨された、

攀じ登る、バランスをとる、投げる、飛び跳ねるそして泳ぐといった運動を出発点として取り入れた。ヤーンのターゲット・グループは、すでにグーツムーツの際にそうであったように、市民的な中間身分であった。とはいえ汎愛派との違いは、ヤーンの活動が学校施設の制度化された範囲に限定されていなかったことである。むしろかれは、意図して学校外の社会的運動を生み出したのである。1810年以降、かれはベルリン門前にある「ハーゼンハイデ」と名づけられた軍隊の演習場へ定期的に若者たちを連れて行き、そこでかれは若者たちと一緒に走路を設置し、登攀の器材やジャンプ台を作り、穴を掘り起こした。このことは、時代の文脈において運動がその教育的機能を超えて軍事力を向上させるうることも期待してなされたのである。42,000名までの軍隊の制限を取り決めたティルジットの和約をうけ、若者たちは起こりうる市民軍での出撃を考慮して身体運動に専念しなければならなかった。ヤーンはこうした体操に期待された目標設定を、かれによって発案された名称「トゥルネン」そして「トゥルナー」を通じて表現した。というのも、かれは言語研究を通じて“Turner”がアレマン語で「戦士」を意味することを見つけ出していたように思われるからである。1818/19年、つまり政治環境が根本的に変化し、またプロイセン政府によって「トゥルネン禁止」(Turnsperre)が布告されるまで、ヤーンの「トゥルナー軍」はプロイセンの100以上の地に普及し、全体で6000名を数えるまでに拡大していたようである。

ヤーンが体操運動を政治的・軍事的文脈で論じていたからといって、これらの運動が軍事訓練と結びついていたことを意味しない。つまりかれはフランス占領軍に不信感を抱いていたで

あろうことを除いて、自発性の原理を保持し続けること、また若者たちが自らねばりと功名心を発展させることを重視していた。ヤーンの運動が多大な損害をこうむり、その団結が失われてから、教練的要素が「トゥルネン禁止」の状況下でトゥルネンに押し付けられたのである。政治反動の時代において国民学校と軍隊では、確かにヤーンがプロイセン政府の「トゥルネン検査官」として推薦されたように、相変わずトゥルネンが行われていた。また他の専門家がなかったために、概してトゥルネン教師としてかれの「弟子たち」が雇われた。しかし、公共における新たな組織化という恐怖から、今や運動は閉ざされた空間の中だけで行われ、そして「フォアトゥルナー：指導者」は場所と規律の問題に直面することになった。これらの問題を解決する一つの戦略は、器械運動のレパートリーの拡大、もう一つは反復練習の号令にしたがった軍事訓練の採用にあった。

新勢力の市民的・自由主義的運動のために、組織的な基盤としての役割が期待された自由なトゥルネン協会が設立されると、トゥルネンの室内化を促す第2の推進力が1840年代以降と1860/70年代以降に誕生した。政治的自由主義の同調者は、すべての大都市と多くの小都市で公的資金によって建設された室内運動場が集会所に適していることを知っていたのである。ホールは通常数十人、一部は100名以上の人々を受け入れるために十分な広さであり、そこには照明がつけられた。その結果、仕事が終わったあとに職業人も運動に参加することができた。この観点は、1863年ないし1868年に自由主義的な進歩党そして国民自由党から分離し、また自覚的に若い工業労働者に訴えかけた社会主義者を納得させたのである。

トゥルネン運動の急速な会員数の拡大は、トゥルネンと政治の結合の成果を物語るものである。1868年に設立されたドイツトゥルナー連盟は——連盟幹部にはもっぱら国民自由主義の同調者が就いていた——1900年に65万人、1914年に120万人の会員を数えるに至った。また1863年に結成され、社会主義路線と結合していた労働者トゥルナー同盟は、1914年に15万人の会員が存在していた¹⁰⁾。これらトゥルネン協会の会員の多くは、いわゆる「トゥルネンの友」(Turnfreunde)として、実際の運動よりも、かれらに各都市、地方そして国民的なアイデンティティを提供し、また相互に政治関係を結びつけるような包括的な社交に興味があったのである。

3. 英国における体操とトゥルネン

a) 19世紀初頭

グーツムーツの『青少年の体育』は各国で広く読まれた。同書は海賊版、剽窃本として流通し、他の言語に翻訳され、数年以内にデンマーク、バイエルン、フランス、オーストリア、オランダ、スウェーデンそしてアメリカで信奉者を得た。英語初版は1800年に刊行されたが、誤ってグーツムーツの師、クリスティアン・ゴットヒルフ・ザルツマン (Christian Gotthilf Salzmann) の名前で出版された。しかし、教本は身体運動の普及に向けた正規のメディアとはならなかった。英語版への翻訳に際して同本が読者に対して結核に対する入門書として推薦されたように、本来の体操の「精神」は紹介されなかったのである¹¹⁾。

それだけに、ヨーロッパ大陸の体操専門家が英国へ渡り、そこで個人的にトゥルネンの事柄

のために活動することが重要であった。このような専門家の一人がアメリカ、ボストン生まれのスイス人、フォキオン・ハンリヒ・クリアス (Phokion Heinrich Clias : 1782-1854)——職業は将校——であった。かれはすでにオランダで体操教師として働き、のちにヤーンとも知り合った。かれは1822年に英国陸海軍から体操教師として招聘され、サンドハーストの英国陸軍士官学校、ウリッジの英国陸軍士官学校、チェルシーの英国陸軍収容所、そしてグリニッジの英国海軍収容所で教鞭をとった¹²⁾。加えて、かれは再び大陸へ戻る1827年まで、貴族や躍進した市民層の子弟たちが通った、名高いチャーターハウスのパブリックスクールにおける「体操指揮官」(Superintendent of Gymnastics)であった。たとえクリアスが1823年に刊行にされた教本、『初級体操教本』のなかで、グーツムーツの信奉者であることを知らしめたとしても、かれの体操授業実践は精密かつ軍隊風の運動への偏愛と訓練の号令(「集まれ!」「整列!」「気をつけ!」)によって特徴づけられた。かれはこの点を——制度的な文脈からすると驚くことではないが——規律修復の必要性を考慮して確立したのである¹³⁾。この結果、英国ではドイツの体操が成立の時点で保持していた遊戯的な要素を十分に展開する前に、体操の訓練の要素が真価を発揮してしまった。

英国における体操ないしトゥルネンの活動家の一人に、ヤーンの弟子であるカール・フェルカー (Cark Voelker : 1796-1884) がいる。かれは1819年、「トゥルネン禁止」による政治的理由から亡命し、1820年代初頭、ロンドンのリージェント公園付近にベルリンのハーゼンハイデを模倣したトゥルネン場を開設した。かれは亡命前、すでにこのようなトゥルネン場をテュー

ビンゲンでも整備していた。かれが明らかに生計を養うこと考慮して取り組んだ自発性は共感され、また、かれは功利主義的学校の哲学者、とりわけジェレミー・ベンサムそしてブルーム卿をトゥルネンの仲間へ引き入れることを心がけた。フィンズベリー・スクエアに築いた2つ目のトゥルネン場も、教養のある人々に厚遇された¹⁴⁾。フェルカーが『スポーティング・ウィークリー』（Sporting Weekly）という冊子で「体操の社会」（Gymnastic Society）の設立を呼びかけると、1826年、かれはクリアスから両者のシステムを公的に比較するよう挑戦を受けた。実際に比較がなされたかどうかは伝えられていない。ともかくも、ロンドンのトゥルネン場は、たとえフェルカーがすでに1829年にスイスへ渡ったとはいえ1939年まで存在したのである¹⁵⁾。

他のヤーンの弟子たちも可能なかぎり、一時的に英国に滞在した。かれらはトゥルネンの宣伝をすべきだったが、影響はそれほど長続きしなかった。この政治的な亡命者——ドイツから来た他の亡命者と同様に——は、この島を「賞賛された国」、すなわちアメリカへの道のりの一時的な滞在地としてしか見なさず、できるだけ早く旅立とうと心がけた¹⁶⁾。プロイセンそして他の中欧諸国とは異なり、英国のトゥルネンがおそらく政治的な衝動を持っていなかったことが、より大きな理由だったように思われる。

この点に関連して、まずナポレオン戦争が言及されなくてはならない。プロイセン・ドイツでは改革者ならびに市民的公共が国家形成にむけて集中的に力を傾注していた矢先にイエナ・アウエルシュテットの壊滅的な敗北を蒙り、すでに言及したようにトゥルネン運動もそこから「利益」を得た。これに対して英国はナポレオ

ン戦争を通じてほとんど影響を蒙ることはなかった。英国軍がナポレオン軍に勝利したことのみならず、戦闘行為も自国でなされることがなく、その結果、たいいていの人々は報道を通じて間接的に戦局を見守っていた。歴史家のジョージ・マコーリー・トレヴェリアン（George Macaulay Trevelyan）は以下のことを指摘している。すなわち、ヨーロッパ大陸で一般兵役義務の思想を実現しようしていた時代に、英国では純粋に文民の個人主義的な文化が花開いていた。「ナポレオンがヨーロッパで暴れまわっていた間、われらハイカラ男たちの放縦と奇行は、伊達男ブランメル時代の中で沸点に達した¹⁷⁾」。すでにゲーツムーツの下で見出され、また帝国設立時代のトゥルネン運動によって宣伝された、獲得されるべき美德としての「男らしさ」（Männlichkeit）の表象——それは力強い、軍事能力のある身体の中に表現を見出した——は、それゆえ19世紀初頭の英国ではまだ根拠がなかったのである。英国のジェントルマンはいつも「男らしく」振舞い、たとえば敗戦を感情抜きに受け入れるときもそのように振舞う。しかし、態度を維持するこの能力は生まれつきのものであり、いわば「天性」だというのがコンセンサスである¹⁸⁾。チャールズ・ダーウィン（Charles Darwin）ならびに初期の英国の優生学者、ないし社会学者のフランシス・ゴールトン（Francis Galton : 1822-1911）とハーバート・スペンサー（Herbert Spencer : 1820-1903）は、身体能力の向上は、トレーニングや運動によるのではなく、ただ遺伝に基づいて達成されると確信していた。加えてスペンサーは、トゥルネンを「不均等発達」をもたらす「作為的な運動」とはっきりと語っていた¹⁹⁾。

進歩的な19世紀においてすら、トゥルネンは

英国において国民的な威信を表明し、国民文化の共通の価値を強調するために必要とされなかった。ドイツ（そしてフランス：そこでは1870/71年の普仏戦争の敗北後、国民的意識を再生するためにトゥルネン運動が公的財政を用いて支援された）とは異なり、連合王国の国家形成はずっと以前に完成していた。一方でイングランド、ウェールズ、スコットランドそしてアイルランドという領域、そして他方で拡大する帝国の政治的統合が、せいぜいのところ問題として浮上した。しかし、トゥルネンそしてトゥルナーの行進はそれに適さなかったのである。なぜならば、トゥルネンの動作は威嚇的な身振りとして誤解されかねなかったからである。英国のスポーツ史家であるリチャード・ホルトが論証しているように、土着のスポーツに手を出すのは当然であったが、しかしウェールズとイングランドのサッカー試合のような「国際的交流」が、2重の機能を果たすことが期待された。「かれらは、支持者たちが己の『文化的な』国家と競争の枠組みを準備した連合国家の両方に、自らの忠義を主張するのを許したのである」²⁰⁾。

加えて、連合王国の統治構造はトゥルネンにとって不都合であった。すでに言及してきたように、確かに様々な運動はドイツのように陸軍の教練プログラムの中に採用された。しかし、海軍の国において陸軍には信望と広範な影響力が欠けていた。というのも、英国には一般的な兵役義務がなく、その結果として社会は全体として兵役によって代表されていると見なされなかった。こうした意識は軍隊が以下のような地方における支配構造のコピーであっただけに、僅かにしか現れなかった。つまり、貴族階級と地方貴族が将校に就任し、かれらが地方・農村

地出身の兵士を統率したのである。それとは逆に、ヴィクトリア王朝時代に文化的な刻印を付されたそれぞれの社会層、すなわち一方で自由業と都市の市民層、他方で労働組合に組織された手工業者と工場労働者は軍隊のなかで多数派ではなかった。なぜならば、命令に従う存在としての兵士は、自立性を考慮するこれら階層にとって尊敬を受ける対象ではなかったからである²¹⁾。それゆえ、1861年に「体操」の変種の信奉者、ショッテン・アーチボルト・マクラーレンに軍隊教練の領域での「身体教育」の再組織化が委ねられると、それは「ドイツのトゥルネン」にといったの打開というより、むしろ否定的な宣伝となった。

パリで修行した剣術師範のマクラーレン (Schotten Archibald MacLaren : 1821-1884)²²⁾ は、かれの剣術学校を1858年に体操学校へ衣替えした。希望者の減少のためだと推測される。というのは、剣術は英国ではほとんど人気がなかったからである²³⁾。このような関係において、かれはドイツのトゥルネンについて問い合わせをし、同時代のドイツトゥルナー連盟傘下の協会でも恒例となっていたように、軍隊のみならず——かれの顧客の周りで運動効果を明らかに証明できることから——文民の体操学校にも精確な身体測定を導入した²⁴⁾。加えてかれは軍隊の訓練として、クリアスによって導入されたロープと木による登攀運動、平行棒運動、跳馬、亜鈴運動などの単調な動作運動を補充した。すなわち、かれはここでもドイツにおける室内の器械運動の独立した運動基準を採用したのである。確かにかれは基準を無条件に取り入れたわけではない。というのも、言うまでもなくかれはスポーツの競争原理を運動の中に融合したからである。この点はこの時代のドイツの

トゥルネン協会ではほとんど許されなかったことである。とはいえ、かれはそれによっても英国人の中にある軍隊体操の否定的なイメージを払拭することはできなかった。なぜならば産業化の文脈において、マクラレーンがこの措置を通じて貴族階級と躍進しつつある「中間階級」から高く評価された理念を尊重するのではなく、訓練を重視したい点が明確だったからである²⁵⁾。

トゥルネンの普及にとって同じく効果がなかった事例として、上級学校カリキュラムへの「体操」の導入がある。すでに言及したクリアスはチャーターハウスのエリート寄宿学校において、パブリックスクールでの体操授業の基礎を創った。また、マクラレーンのもとでハロウ、ウェリントンそしてウインチェスターのパブリックスクールで「体操」が設けられた。それはいずれにせよ同年に着手された「プレーイング・フィールドズ」と同様に大々的に構想された。しかしながら、1860年代の中葉のパブリックスクールは、すでに「ゲーム」の数十年にわたる伝統を回顧しており²⁶⁾、その結果、トゥルネンは最初から競争にさらされたのである。この伝統は、チームスポーツがある種の特殊英国のエリート・国民文化の伝統（賭け事、明確な社交形態）に依拠しているかぎり優勢であった²⁷⁾。またその結果として、トゥルネンの運動はパブリックスクールでも、進行する19世紀そして20世紀を通じてサッカー、クリケット、陸上競技、ボートそして他のスポーツ種目のような人気を博することはなかった²⁸⁾。トゥルネンの授業が決して名声を得ることのない「教練する軍曹」に部分的に委ねられ、また授業が複数の教師によって教育的措置としても指示されたことも嫌悪感を増幅させた²⁹⁾。

さらに悪いことに、ヴィクトリア王朝時代の英国の教育政策の権威者——たとえば、マシュー・アーノルド（Matthew Arnold）と時の学務委員会（パブリックスクールのクラレンドン委員会：1861年、トーントン・スクールの調査委員会：1864年）——は、時代の一般的な「スポーツ熱狂」（sport craze）を背景に〔トゥルネンにとって〕不利な公式見解を発表することを通じて、トゥルネンに対する高い評価を拒んだ。このことはとりわけ、裕福な両親を獲得しようとしていたパブリックスクールの何校かが、「戸外運動競技」をカリキュラムの中に取り入れた点も考慮してなされた。確かにアーノルドは「ドイツのトゥルネン」が英国の人々に好まれていた多くのスポーツ種目よりも「すぐれた身体訓練」となりうることを容認していた。しかし、トゥルネンを学んだ若きプロイセン人が、通常、英国のエリート学校の若者のように「さわやか、幸福、健康的」という印象を与えようとしない点が目立つと語っている³⁰⁾。また、イートン校の教師で、後にケンブリッジ大学の「個人指導教師」となったオスカー・ブrowning（Oscar Browning）は、プロイセンの秩序思想の身体化と見なしていたトゥルネン運動が、スポーツに特徴的な競争的性格を授業で補えることを疑っていた。「しかし、ハロー校の〔サッカーの〕イレブン、あるいはまたイートン校の〔ボート競技〕のエイトのトレーニングに勝るルールに対する完全な服従を、一体何が示すことができるのだろうか。この両者は体操よりはるかに、忍耐力、勤勉さ、そして団体行動への個々人の自発的な自由放棄を必要とする」³¹⁾。1864年のクラレンドン委員会の「報告書」は、事柄に関するこの見解を、いくぶん官職風に示している。すなわち、「組織に健康と

活力を与える身体トレーニングは、大陸でその目的のために雇用されている体操の訓練によってではなく、英国の学校で分け与えられます。……しかし、さらに戸外運動競技——それが当該の目的に十分役立っている間に——によって、他の用途にも適用できるのです……³²⁾」。

パブリックスクールはエリート学校として、トゥルネンに大衆的な影響をもたらすことにほとんど適していなかった。広範な人々への普及を考慮すれば、初等学校こそが重要であった。しかしこの文脈で、こういった留保が表明されることはなかった。むしろ政治家と官僚にとって「支配階級にふさわしい身体教育の一つのタイプがあるべきだ」というのは常識であった。すなわち、スポーツは「大衆のための身体教育」である『『体操』とは異なる』と。英国の初等学校の全般的な時代遅れゆえに、このような見解はトゥルネンにとって有利に働かなかった。英国において義務教育は1876年と1880年の教育法令を通じてようやく導入され、また1890年の過程で初等学校においてトゥルネンの授業が必修科目として設けられた³³⁾。しかし、しかるべき法令の現実への転化は、さらに遅れることになった。たとえば、1895年の官庁の調査からは、ロンドンのチャーリング・クロスの1マイル周辺に25,000人の子どもたちが住んでおり、そこでは遊戯・トゥルネン場が自由に使えないことが明確になっている³⁴⁾。

どのみち多くの教師は、遅かれ早かれ、初期のグーツムーツとマクラーレンへの指向を経て、器械を用いず、また僅かなスペースでも可能な、いわゆる「スウェーデン体操」へ移行した。とういうのは、一般的に体操の授業はスペース不足から、教室あるいは学校の表玄関ホールで行われていたからである³⁵⁾。こうした制約

された関係ゆえに体操の授業は好まれず、19世紀後半に少なくとも若者にとってサッカーがオルタナティブとして示されると授業は大きく緩和された。バーミンガムとロンドンでは、このような方向へのイニシアティブがすでに1880年代に開始され、また1890年に学校選抜チームの最初のトーナメントが実施された。世紀転換期後、このトレンドはサッカーに一般化された。1904年、英国学校サッカー協会が設立され、また教育省は1906年にサッカーを初等学校のカリキュラムへ正式に採用した³⁶⁾。生徒たちはトゥルネンを失って涙ひとつこぼさなかったのである。

b) 19世紀末期と20世紀初頭

19世紀の最初の数十年において「体操」とトゥルネンが様々に供給され、しかし——軍隊と学校を除き——さほどの需要がなかったなかで時代が世紀末期ともなると、トゥルネンに対する状況は改善されていった。連合王国の卓越した軍事力を喚起したボーア戦争（1899-1902）が英国世論における需要促進の最初の一撃となった。集団検診が義勇軍の破滅的な健康実態を明らかにした問題に新たな照明が当てられ³⁷⁾、そしてこの時代になってはじめて世論が広く身体教育に関心を抱き始めた³⁸⁾。それは騎兵隊将校ロバート・ベーデン＝パウエル卿（Sir Robert Baden-Powell）のボーイスカウトのような準軍事組織の中で生まれた。当時、ボーイスカウトは大陸での同様な組織とは異なり、トゥルネンそしてスポーツと直接的な接触はなかった³⁹⁾。身体教育の価値を引き上げたさらなる要因は、同年になされた教育制度における教会と国家の徹底した分離であった。両者とも愛国的なカードゲームに耽け、独自の影響力を行使あ

るいは拡大するために、今や青少年労働者を重視するよう心がけた⁴⁰⁾。加えて、最終的に労働者階級の一部が身体運動への興味を告げた。労働組合はこの間に正当な社会的権力を発展させたが、かれらは相変わらず市民社会生活の多くの分野から排除されていたのである。「競技会」と「戸外運動競技」もそれに含まれていた。ここではスポーツによる営利を禁止したアマチュア規定が、競技者をもっぱら裕福なジェントルマンの範囲からしか募集しないという、多様でインフォーマルな排除のメカニズムを請け負ったのである。労働者——道徳的な配慮から競技スポーツから遠ざかっていた女性も——はそれゆえ、かれらが身体を鍛えたい場合は他の方法を追求しなくてはならなかった。トゥルネンと体操は歓迎されるべきオールタナティブをこれらの者たちに提供したのである。

「ドイツのトゥルネン」は見てきたように、このような「時代精神」で得をした。しかしそれは、長期間、付随現状であり続けた。その原因を探求すれば何よりもこの領域においてすでに19世紀末には成立し、今や目に見えて明確になりつつあるドイツと英国の文化交流の構造的な問題が浮き彫りになる。次のような比較においてそれを追体験するのが最も適しているだろう。すなわち、19世紀末に「英国のスポーツ」に関心を寄せたヨーロッパ大陸諸国は様々な種目と対峙することになった。しかし、これらの種目がスポーツの原理、つまり（英国の）ルールにしたがってなされ、監視委員会から監督される競技として組織化されることにおいてはすべて共通しており、この点は受容を容易にした。19世紀末に私人として「体操」に興味を示した英国人は、一つの種目としてのみそれを行ったに過ぎない。しかし、その受容はより困難

であった。というのもグーツムーツ以来、「体操」はほとんどすべてのヨーロッパ大陸諸国に普及し、それぞれの「流派」を形成したからである。このような事情の下、誰もが最初から「ドイツのトゥルネン」に向かうことなど期待できなかったのである。『スポーツ百科事典』（Encyclopedia Sport : 1897年）が伝えているように、「ギリシアの体操」（「裸体」）、「スウェーデンの体操」（「徒手体操」）、「デンマークの体操」（「戦争の性格らしきものをとものった」）、「スイスの体操」（「絵に描いたように美しい、そしてしばしばチロルのコーラスに伴奏されて」）、「フランスの体操」（「成功を確実にさせるために満場一致で行う」）、「イタリアの体操」、「スペインの体操」、「フィンランドの体操」、「ロシアの体操」が存在していたのである⁴¹⁾。このことは有利な受容環境にもかかわらず、普及の成果が多くの点で個々の人間の社会参加、およびそれらの人々による特別な斡旋方法に左右されていたことを意味している。

女性の体操はスウェーデンから移住した2人の女性教師、レフヴィング（Löfving）とベルクマン・エスターベルク（Bergman-Oesterberg）によって指導的に行われた。彼女らは「スウェーデン体操」の学問的基礎を発展させ、英国の教育当局の下で財政的支援を調達することを知っていた。彼女らは数年以内に女性体操教師職の職業化を達成し、その結果、スウェーデンモデルが長期間、受容され続けることになったのである⁴²⁾。

1861年以降、ロンドンにあるドイツのトゥルネン協会が男性構成員のための体操に貢献した。その活動に関しては、やや詳しく紹介しておきたい。イニシアティブは、当時、約3万人の住民が住んでいたドイツ人コロニーから生ま

れた⁴³⁾。協会の「設立の父」は、ヤーンの弟子で「古き1848年の闘士」であったアウグスト・ラヴェンシュタイン（August Ravenstein）——かれはすでに1830/40年代にフランクフルトにおけるトゥルネン運動を組織していた——の子、エルンスト・ゲオルク・ラヴェンシュタイン博士（Dr. phil. Ernst Georg Ravenstein）と見なされている⁴⁴⁾。協会の目的として「英国にドイツの体操を導入し、促進させること。そして親密な交流を通じて、先祖代々縁続きの2国家間における、よりよい相互理解を成し遂げること⁴⁵⁾」が謳われた。

ドイツ・英国の理解に向けた2つ目の目的は、偶然に記されものではない。なぜならば、ロンドンにおけるドイツ人コロニーは、その年、徐々にまとまりを失い始めていたからである。この点に関しては、一部はドイツからの移住傾向の後退に、一部はドイツ、より正確にはプロイセンにおける政治的展開に原因があった。プロイセンでは1859年の王位交代をもって「新時代」（neue Ära）がスタートし、この時代は1848/49年の敗北した革命後の政治反動を終わらせ、また特赦が発令された。それ自体喜ばしい展開は、ロンドンにおけるドイツ人コロニーにとって、ローター・ブッハーあるいはヴィルヘルム・リープクネヒトのような有名な「1848年闘士」が今や帰国するに至って問題と化した⁴⁶⁾。加えて「新時代」は、ドイツにおいて自由主義的な一派である国民協会の設立をもたらした。また当協会はいわゆる在外ドイツ人も統合しようと試みた。つまりロンドンのトゥルネン協会は、国民協会のロンドン支部協会の指導的メンバーによる、国民的な宣伝活動の広範な基盤を提供し、またそれを通じて政治的な傾向の面で疎く、あるいはドイツの歴史にほとん

ど興味を示さない英国のドイツ人を、かれらの政治のために動員する試みでもあったのである⁴⁷⁾。すでに言及したように、このトゥルネン協会とスポーツの結合がドイツにおいてまったく同様に試みられたのである。

ドイツ人トゥルネン協会の協会史は、さしあたり大成功裏に始まっている。すでに1865年には、パンクラス街にある協会独自の室内トゥルネン施設を開設することができ、その建物は模範的なものと見なされ、またドイツ人コロニーの住民からも運動の場としてのみならず、集会所としても利用できるように進んで受け入れられた。そこであらゆる種類の祭典が催され、コンサートや観劇会もあり、またとくに政治的な催しの多くが実施された。建物の中では、トゥルネン協会の合唱班がリハーサルを行い、また協会の図書室も設置された⁴⁸⁾。これらすべてのことが、慈善協会、社交協会、労働者教育協会、教区、ドイツ人学校、商店、コーヒーハウスなどと同様に、ロンドンのトゥルネン協会をドイツ人コロニーの中心的、社会的機関にしたのである⁴⁹⁾。

ドイツ人氣質を育むことは、トゥルネン活動が英国人や他の外国人からも共感をえることを妨げなかった。1870年代初頭、これらドイツ人以外の会員は、300から350名のドイツ人会員の3倍にあたる約1000名を数え、また英国人はロンドンや他の英国の大都市にさらにトゥルネン協会を設立させることを考えていた⁵⁰⁾。このような連鎖的効果に基づくならば、ロンドンにおけるドイツ人トゥルネン協会の会員数が一度たりとも1500名を上回ることがなく、加えて1880年代の初頭以降は後退に転じたことを失敗と決めつけてはならないだろう。いずれにせよ幹部たちは、トゥルネンの望み通りの普及を反映し

ていたと思っていたのである⁵¹⁾。

確かに、減少を引き起こしたのは英国人であったことを会員数の統計は証明している⁵²⁾。しかし、この説明は唯一の可能性ではない。なぜならば、経験的に考えれば、親協会の会員数の減少は、とりわけ19世紀における新たなトゥルネン協会の設立に伴う意見の違いによって生じた分裂傾向がその原因と見なされたからである⁵³⁾。ロンドンのトゥルネン協会の場合、このような対立を詳細に探究するための史料が十分ではない。しかし、色々な点を考慮すると協会はこのような理由からも会の財政力を弱めたと推測できるかもしれない。

トゥルネン協会の幹部がドイツの国民協会の模範にしたがって、労働者階級の構成員の参加を法外に高い会費を通じてやめてしまうことが第1の指標である。そのことによってロンドンのトゥルネン協会は、ドイツ本国と同様にドイツ人コロニーの中に出現した労働者階級と市民層の間の溝を再び設け、それを深刻化させた⁵⁴⁾。一般的にドイツ人移住者よりも実入りのよかった英国人労働者は高額な会費によって必ずしも怯むことはなく、また協会の外国人会員の下には多数の労働者が存在していた⁵⁵⁾。しかし、非ドイツ人として英国人には会員としての投票権が与えられず、その結果、かれらは協会政策に影響力を行使できなかった⁵⁶⁾。それゆえ減少する会員数は投票数の結果だという点を是認することもできる。

加えて、国民協会との結合を通じた政治化も不利な影響をもたらした。政治化が意見の異なる者の排除をもたらすのだから会員数はさらに減少したであろう。というのも、史料が提示しているすべての事柄に従えば、——ドイツ本国のトゥルネン協会の内部とは異なって——ロン

ドンの協会には熱心な政治的な監督者が存在しなかった。水晶館における恒例のトゥルネン祭の場で、フェルディナント・フライヒラート (Ferdinand Freiligrath)、ヨーハン・ゴットフリート・キンケル (Johann Gottfried Kinkel) そしてカール・ブリント (Karl Blind) のような民主主義的抵抗運動の代表者もスピーチの機会を与えられた。また、ドイツにおいて国民協会の関心を引いた、ある種の日々の政治論争——たとえば、ドイツ・デンマーク戦争、プロイセン・オーストリア戦争の時代に生じた軍事的トゥルネンに関する論争——は、ロンドンのドイツ人トゥルネン協会では顕在化しなかった⁵⁷⁾。いずれにせよ、ドイツにおける市民的・自由主義運動との結びつきは、それによって政治に通じた英国人の世話役との共同を妨げたという意味において、ロンドンのトゥルネン協会の発展にブレーキをかけたのである。というのも国際的な視点で比較すれば、外国における「ドイツのトゥルネン」は、このような結びつきを経由して時々の「ホスト社会」 (Wirtsgesellschaft) へ統合されたときにのみ、長期的な成功を収めたといえるからである。その一例がアメリカ合衆国である。そこでは、ドイツ人移住者によって創られたトゥルネン協会の多くが、原住民保護主義と奴隷制に反対する原理宣言を共有し、また南北戦争では独自のトゥルナー中隊を結成した⁵⁸⁾。他の事例は第2帝政の崩壊後のフランスである。同国ではドイツの模範にしたがって設立されたトゥルネン協会が、国民を鼓舞するための大衆運動の基盤を共和主義憲法に基づいて構築している⁵⁹⁾。外国におけるトゥルナーが、どのような「論点」を取り上げるのかは些細なことであったかもしれない。しかしかれらが取り組んだ案件は——運動

の構造ゆえに何の変哲もない、誠に単調な事柄であったが——持続可能な足場を固めるためにもこのような支援を必要としていたのである。

ロンドンにおけるドイツ人トゥルネン協会は、以下のことを通じてこの欠乏部分を補った。すなわち、協会は初期から英国のスポーツ運動と接触し、それによって競争の魅惑を自己の利益のために利用したのである。確かにこの点はドイツにおけるトゥルナー界の政策と両立しなかったが、しかし、走、跳躍、登攀、石投げ、レスリング、ほどなくしてボートと自転車における競争が会員から熱狂的に支持されたという成果によって正当化された。長期にわたり協会の会長を務めたエルンスト・ゲオルク・ラヴェンシュタインは、トゥルネンをスポーツ化するために特段に力を発揮した。かれはロンドンのドイツ人トゥルネン協会の「設立の父」であったのみならず、他種目のスポーツ組織の重複幹部としても要職を担っていた。英国初——いずれにせよ挫折した——の総合スポーツ組織である国内オリンピック連盟（1866年創設）、アマチュア水泳連盟（1869年設立）の出発点となったメトロポリタン水泳連盟、そしてアマチュア体操連盟（1880年創設）がそれに含まれていた⁶⁰⁾。すでに1860年代末において、ロンドンのドイツ人トゥルネン協会のスポーツ化は内部対立が生じるまでに至った。1868年、水晶館で大規模なトゥルネン・スポーツ祭典が開催されたとき——その際、もっぱら「スポーツ中毒」の英国人が勝利をさらった——ドイツ人の会員はひどく立腹して以下のように語っている。「純粋にドイツ生活が生まれた聖地とドイツの教えを育む植物の大地が英国の要素に明け渡されてしまった」と⁶¹⁾。

いずれにせよ、英国における「ドイツのトゥ

ルネン」に対してなされた「スポーツ化」の大衆化効果を過大評価してはならない。その理由は、ロンドンのドイツ人トゥルネン協会と他の英国の大都市におけるトゥルネン協会はアマチュアリズムの陣営に確固として属しており、またこの時代において「ジェントルマン」と見なされたい英国の競技者がふるまっていたように、同時代のスポーツの商業化を拒絶していたからである。それによって、英国におけるトゥルネン運動の行動範囲は根本的に制限された。なぜならば、大衆雑誌、広告産業、その他の商業主義的に興味を抱いている人々は、スポーツメディア産業の景気を刺激し、また多くの読者を獲得するために、目的に合致したスター選手や話題性を生み出す種目の方を好んで取り上げたからである⁶²⁾。加えて、トゥルネンに好意的な英国人の多くがサッカーの方へ乗り移ってしまうと行動範囲はいよいよもって狭められた。特徴的なことは、サッカー試合の興行が非常に広範囲に繰り広げられることによって国内リーグがその興行を引き受けると、上述したロンドンのドイツ人トゥルネン協会の会員数の減少が1880年代に初めて明確な形で現れたことである。また、運動好きの同時代人の余暇活動として、今やサッカー試合は急速に大衆性を獲得し、その結果、1910年のフットボール連盟の概算によれば、すでに50万人の現役のサッカー競技者が存在していたのである⁶³⁾。

さらに英国におけるトゥルナーは、その独自の領域、すなわち身体形成の面で激しい競争をともなうヴィクトリア王朝期の英国における余暇生活の商業化と対峙することになった。というのは世紀転換期頃に、近代のボディービルディングがはじめて世間をにぎわしたからである。1890年代末の英国には、ボディービルディ

ングの「考案者」と見なされているモデルのユーゲン・サンドウ（Eugen Sandow）にちなんで名づけられた、いわゆるサンドウ施設がすでに20箇所あった。かれの名前を付したフィットネス器具と健康栄養食が商品化された。スポーツ運動の一部として近代のボディビルディングが誕生し、またこの種目のファンがそのコンテストをスポーツ場で実施していたドイツとは異なり、サンドウは英国において、とりわけ労働者が出入りするミュージック・ホールで出演し、また1901年9月にはロイヤル・アルバート・ホールも自由に使用することができた。それゆえ英国の市民的「中間階級」にとっての最良もユーゲン・サンドウに向けられたのであり、標準的な権威として身体形成を理解していたロンドンのトゥルネン協会ではなかった。博物学収集の資格をもっている大英博物館長は、サンドウを自称抵抗力のある「コーカサス人種」の精華であると表明し、また国王ジョージ5世は、1911年にサンドウを「身体文化学教授」に任命した⁶⁴⁾。

4. おわりに

ロンドンにおけるドイツ人コロニーが第1次世界大戦によって破壊されると⁶⁵⁾、英国における「ドイツのトゥルネン」はすでに「時代遅れ」となった。戦争後、それは完全に忘れ去られ、ヨーロッパ大陸のファシズム国家における身体教育の表向きの成果に影響され、英国政府は1937年に国家フィットネス協議会を設立したが、当然のことながら、それは国民社会主義者によって解散させられたドイツトゥルナー連盟ではなく国民社会主義の余暇組織、「歓喜力行団」（KdF）を模範としていた⁶⁶⁾。英国人がす

で19世紀初頭以来、トゥルネンを無視してきたことを踏まえれば、このような軽視は首尾一貫していたように思われる。設立に向けたあらゆる取り組みは挫折し、また世紀が進めば進むほど、ますますトゥルネンの意義は薄れていった。

19世紀初頭に汎愛派の体操とヤーンのトゥルネンが初めて英国に紹介されると、それらの制度化はとりわけ軍隊と教育制度の構造、つまり教育がされていない絶対主義的な伝統および国家から自由である市民社会領域の形成の結果として出現した限定条件を前にして失敗した。加えて、トゥルネンをヨーロッパ大陸諸国の中でナポレオン戦争とフランスの占領下で保持するといった政治的衝撃が生じたが、英国は戦争から免れたままであり、その文明的長所を引き続き発展させた。このような展開を概念化しようすれば、トゥルネンは「英国の特殊な道」に破れたと規定することができるかもしれない。

市場を経由して成立した近代の余暇文化——ブリテン島におけるあらゆる生活圏の初期の徹底した商業化の付随現象あるいは結果として解釈できる——を介し、この「特殊な道」は19世紀後半に再度トゥルネンに不利な結果をもたらした。この局面で文化伝播をさらに困難にさせた2つ目の要因が加わった。つまり、英国におけるトゥルネンにとって不利な限定条件を自身の努力によって補おうとする、ロンドンに住むドイツ人移住者の無駄な試みである。この試みは、とりわけ移住者たちがその行動において、特殊ドイツ的な方法による限定条件によって、かれらの側から近代の中に食い込んでしまったがゆえに失敗したのである。この関連において、とりわけロンドンのドイツ人トゥルネン協会の市民的・自由主義的な会員も逃れることが

できなかった労働者排除の傾向も言及できるだろう。このようにして、関係者たちが構造的な問題を反映することなく、ドイツのトゥルネンの擁護者と英国における潜在的な入会希望者との間に相互不信が生み出されたのであり、それは結局のところ、両者がトゥルネンへの興味を失うという結果をもたらしたのである。

注

- 1) Vgl. Cristiane Eisenberg, *“English sports” und deutsche Bürger. Eine Gesellschaftsgeschichte 1800–1939*, Paderborn 1999.
- 2) Vgl. Peter C. McIntosh, Games and Gymnastics for Two Nations in One, in : J. G. Dixon u. a., *Landmarks in the history of Physical Education, London 1973*, S. 177–208 ; ders., *Physical Education in England since 1800*, London 1968 (zuerst 1952).
- 3) Rudolf Muhs, Geisteswehen: Rahmenbedingungen des deutsch-britischen Kulturaustauschs im 19. Jahrhundert, in : Muhs, Rudolf u. a. (Hg.), *Aneignung und Abwehr. Interkultureller Transfer zwischen Deutschland und Großbritannien in 19. Jahrhundert*, Bodenheim 1998, S. 44–70, hier S. 70. Vgl. auch schon Percy Ernst Schramm, Englands Verhältnis zur deutschen Kultur zwischen der Reichsgründung und der Jahrhundertwende, in : Werner Conze (Hg.), *Deutschland und Europa. Historische Studie zu Völker- und Staatenordnung des Abendlandes. Fs.f. Hans Rothfels*, Düsseldorf 1951, S. 135–175.
- 4) Vgl. Allen Guttman, *Games and Empires. Modern Sports and Cultural Imperialism*, New York 1994, S. 146–156; Wolf Krämer-Mandau, Gymnastic Systems and Turner Movement in Latin America, in : Roland Naul (Hg.), *Turnen and Sport. The Cross-Cultural Exchange*, Münster 1991, S. 21–49.
- 5) Geisteswehen, S. 70.
- 6) Vgl. Hans-Christoph Schröder, Die neuere englische Geschichte im Lichte einiger Modernisierungstheorien, in : Reinhart Koselleck (Hg.), *Studien zum Beginn der modernen Welt*, Stuttgart 1977, S. 30–67; Bernd Weisbrod, Der englische “Sonderweg” in der neueren Geschichte, in : *GG* 16, 1990, S. 233–252; Hermann Wellenreuther, England und Europa. Überlegungen zum Problem des englischen Sonderwegs in der europäischen Geschichte, in : Norbert Finzsch u. Hermann Wellenreuther (Hg.), *Liberalitas. Fs. F. Erich Angermann*, Stuttgart 1992, S. 89–123; ferner Perry Anderson, Components of the National Culture, in : *New Left Reviv*, Nr. 50, 1968, S. 3–20.
- 7) Vgl. Peter Payne u. a. (Hg.), *British Culture and Economic Decline*, London 1990.
- 8) Vgl. Friedrich H. Tenbruck, Was war der Kulturvergleich, ehe es den Kulturvergleich gab, in : Joachim Matthes (Hg.), *Zwischen den Kulturen? Die Sozialwissenschaften vor dem Problem des Kulturvergleich*, Göttingen 1992, S. 13–36; Malcom Waters, *Globalization*, London 1995.
- 9) 以下の叙述は、私の『「英国スポーツ」とドイツ市民』（注1）の第2章を基本にしている。そこでも個々の証拠が提示されている。
- 10) 数値に関しては、Hans-Georg John, Die Turnbewegung in deutschen Kaiserreich von 1871, in : Horst Ueberhorst (Hg.), *Geschichte der Leibesübungen*, Bd. 3/1, Berlin 1980, S. 278–324, hier S. 324 (1869–1910); Eberhard Jeran, Deutsche Turnerschaft (DT) 1868–1936, in : Dieter Fricke u. a., *Die bürgerlichen Parteien in Deutschland. Handbuch der Geschichte der bürgerlichen Parteien und anderer bürgerlicher Interessenorganisationen vom Vormärz bis zum Jahre 1945*, Bd. 1, Leipzig 1968, S. 605–619, hier S. 606.
- 11) C. G. Salzmann, *Gymnastics for Youth: or a*

- practical guide to healthful and amusing Exercises for the use of schools. An Essay toward the necessary improvement of education chiefly as it relates to the body, freely translate from the German*, London 1800. Vgl. auch McIntosh, *Physical Education*, S. 79; Willi Schröder, *Johann Christoph Friedrich GutsMuths. Leben und Werk des Schnepfenthaler Pädagogen*, Sankt Augustin 1996, S. 135ff.
- 12) Vgl. McIntosh, *Physical Education*, S. 80. クリアスの経歴は, Klemens C. Wildt, *Daten zur Sportgeschichte*, Tl. 2: Europa von 1750-1894, Schorndorf 1972, S. 149, 153, 167, 173, 187f.
- 13) Vgl. McIntosh, *Physical Education*, S. 80, 82.
- 14) Vgl. ders., *Sport in Society*, London 1963, S. 59. フェルカーに関しては, Wildt (注12), S. 35, 188.
- 15) Vgl. ebd., S. 39, 151, 158, 188.
- 16) この見解に関しては, Sabine Sundermann, *Deutscher Nationalismus im englischen Exil. Zum sozialen und politischen Innenleben der deutschen Kolonie in London 1848-1871*, Paderborn 1997, S. 29. アメリカにおけるヤーンの弟子たちの活動に関しては, Vgl. Klemens C. Wildt, *Auswanderer und Emigranten in der Geschichte der Leibesübungen*, Schorndorf 1967; Steven A. Riess, *Sport and the Redefinition of Middle-Class Masculinity in Victorian America*, in : S. W. Pope (Hg.), *The New American Sport History. Recent Approaches and Perspectives*, Urbana u. Chicago 1997, S. 173-197, hier S. 175.
- 17) George Macaulay Trevelyan, *English Social History*, London 1944, hier zit. nach Derek Birley, *Bonaparte and the Squire : Chauvinism, Virility, and Sport in the Period of the French Wars*, in : J. A. Mangan (Hg.), *Pleasure, Profit, Proselytism. British Culture and Sport at Home and Abroad 1700-1914*, London 1988, S. 21-41, hier S. 22.
- 18) Vgl. Birley, *Bonaparte*; Barrington Moore, *Soziale Ursprünge von Diktatur und Demokratie. Die Rolle der Grundbesitzer und Bauern bei der Entstehung der modernen Welt*, Frankfurt 1974 (1969), S. 558. 19世紀の英国スポーツにおける身体要素の考察に関してはさしあたり, Richard Holt, *The Sporting Body in the Nineteenth Century*, unveröff. Ms. Montfort University Leicester 1999.
- 19) Vgl. John Hobermann, *Sterbliche Maschinen. Doping und die Unmenschlichkeit des Hochleistungssports*, Aachen 1994, S. 106, 107 (Spencer-Zitat), 110.
- 20) Richard Holt, *Contrasting Nationalisms: Sport, Militarism and the Unitary State in Britain and France*, in : *IRSpH* 12, 1995 (Special Issue: Tribal Identities. Nationalism, Europe and Sport), S. 39-54, hier S.44.
- 21) Vgl. Hew Strachan, *Militär, Empire und Civil Society: Großbritannien im 19. Jahrhundert*, in : Ute Frevert (Hg.), *Militär und Gesellschaft im 19. und 20. Jahrhundert*, Stuttgart 1997, S. 78-93.
- 22) 経歴と以下の叙述に関して, Wildt, (注12), Tl.2, S. 190, 193-198; McIntosh, *Physical Education*, S. 96.
- 23) マクラーレンは, 明らかに廃れかけた領域のなかで学んだ。というのは, 大陸で決闘の実施の手段であった剣術は, 英国ではとっくの昔にボクシングによって淘汰されてしまっていたからである。Vgl. Maria Kloeren, *Sport und Rekord. Kulturosoziologische Untersuchungen zum England des sechzehnten bis achtzehnten Jahrhunderts*, Leipzig 1935, ND Münster 1985, S. 105-112; Herbert Schöffler, *England das Land des Sportes. Eine kulturosoziologische Erklärung*, Leipzig 1935, S. 9-49. insb. S.41.
- 24) Vgl. Wilhelm Angerstein, *Versuch einer Statistik der Körperbeschaffenheit und Leistungsfähigkeit bei den deutschen Turnern*, in : Ferdinand Goetz/ A. F. Böhme (Hg.), *Drittes statistisches Jahrbuch der Deutschen Turnerschaft, Im Auftrage des Ausschusses der Deutschen Turnerschaft*, Leipzig 1871, S. 207-237.

- 25) Vgl. Archibald MacLaren, National Military Systems of Bodily Exercise, in : *MacMillan's Magazine* 1863.
- 26) Vgl. Timothy J. L. Chandler, Emergent Athleticism: Game in Two English Public Schools, 1800-60, in : *The International Journal of the History of Sport* 5, 1988, S. 312-330; 大学に関しては, Sheldon Rothblatt, The Student Sub-culture and the Examination System in Early 19th Century Oxbridge, in : Lawrence Stone (Hg.), *The University in Society*, Bd. 1 : Oxford and Cambridge from the 14th to the early 19th Century, Princeton 1974, S. 247-303.
- 27) Vgl. Robert W. Malcomson, *Popular Recreations in English Society 1700-1850*, Cambridge 1973; Thomas S. Henricks, *Disputed Pleasures. Sport and Society in Preindustrial England*, New York 1991; Dennis Brailsford, *Sport, Time, and Society. The British at Play*, London 1991.
- 28) Vgl. McIntosh, *Physical Education*, S. 96; ders., *Game and Gymnastics*, S. 189.
- 29) Vgl. ebd., S. 193; ders., *Physical Education*, S. 101; Hermann Raydt, Ueber Jugendspiele und Leibesübungen in England, in : *Universum*, Dresden, Bd. 3, 1887, 1. Tl., S. 505-17, 576-85, hier S. 515.
- 30) Matthew Arnord, The Complete Prose Works, Bd. IV: School and Universities on the Continent, hg. V. R. H. Super, *University of Michigan Press* 1964, S.91.
- 31) Oscar Browning, Mr. Matthew Arnord's Report on French Education, in : *Quarterly Review* 125, 1868, S. 482.
- 32) McIntosh, *Games*, S. 177f.
- 33) Vgl. ebd., S. 191. Holt, *Contrasting Nationalisms*, S. 44.
- 34) Vgl. Richard Holt, *Sport and the British. A Modern History*, Oxford 1989, S. 142.
- 35) この視点に関して, 私はフランク・ガリガンに依拠している。Frank Gallgan, Droitwich Spa/Worcestershire; Vgl. Holt, *Sport*, S. 142.
- 36) Vgl. Tony Mason, England, in : Christiane Eisenberg (Hg.), *Fußball, soccer, calcio. Ein englischer Sport auf seinem Weg um die Welt*, Münster 1997, S. 22-40, hier S. 29f.
- 37) Vgl. Rex Pope, *War and Society in Britain, 1899-1984*, London 1991, S.2.
- 38) 日付に関しては, Vgl. Holt, *Sporting Body*.
- 39) John Springhall, *Youth, Empire and Society. British youth Movement, 1883-1940*, London 1977.
- 40) Vgl. Holt, *Contrasting Nationalism*, S. 41-44.
- 41) A[rchibald] Alexander, Art. "Gymnastics", in : The Earl of Suffolk and Berkshire u. a. (Hg.), *The Encyclopedia of Sport*, Bd. 1, London 1897, S. 500-502.
- 42) Vgl. Sheila Fletcher, The Making and Breaking of a Female Tradition: Women's Physical Education in England, 1880-1980, in : James A. Mangan/Roberta Park (Hg.), *From 'Fair Sex' to Feminism. Sport and the Socialization of Women in the Industrial and Post-industrial Eras*, London 1987, S. 145-160.
- 43) ズンダーマンによる報告。Sundermann, *Nationalismus*, S. 12.
- 44) 父に関しては, Wildt, *Daten*, Tl. 2, S. 42, 46, 75; 子に関しては, Sundermann, *Nationalismus*, S. 16, 170, 172f.
- 45) 引用は, Leopold Katscher, German Life in London, in : *The Nineteenth Century* 2, 1887, S. 726-741, hier S. 729.
- 46) Vgl. Sundermann, *Nationalismus*, S. 71.
- 47) Vgl. ebd., S. 153.
- 48) この点そして以下の叙述はロンドンのドイツトゥルネン協会50年史に依拠している。*Festschrift zum Fünfzigjährigen Bestehen des Deutschen Turnverein in London 1861-1911, London 1911*. Vgl. Hajo Bernett, Vom Schwarz-Rot-Gold zum Schwarz-Weiß-Rot. Die Geschichte des Deutschen Turnverein in London 1861-1911, in : Andreas Luh/Edgar Beckers (Hg.), *Umbruch und Kontinuität im Sport* —

- Reflexionen im Umfeld der Sportgeschichte. Fs. F. Horst Ueberhorst*, Bochum 1991, S. 298-309, ならびに Sundermann, *Nationalismus*, Kap. III. 4.
- 49) Vgl. ebd., S. 13. ロンドンのドイツ人コロニーに関しては、その他にも、Rosemary Asthon, *Little Germany. Exile and Asylum in Victorian England*, Oxford 1986; Panikos Panayi, *German Immigrants in Britain during the 19th Century, 1815-1914*, Oxford 1995.
- 50) Vgl. *Festschrift*, S. 20, 36.
- 51) Vgl. ebd., S. 20.
- 52) Vgl. ebd., S. 36.
- 53) Vgl. Ferdinand Goetz, *Vom rechten Turnerleben. Ein Noth- und Hilfsbüchlein für Turner solche, die es werden wollen*, Leipzig 1891, S. 28.
- 54) この点に関しては, Ashton, *Little Germany*; Sundermann, *Nationalismus*.
- 55) Vgl. die Charakterisierung der Sozialstruktur des Vereins in der *Festschrift*, S. 20.
- 56) Vgl. Sundermann, *Nationalismus*, S. 157.
- 57) Vgl. ebd., S. 166ff.; *Festschrift*, S. 8. Bernett, Schwarz-Rot-Gold の異なる解釈は裏付けられていない。
- 58) この意味における社会主義的なトゥルネン協会は、とりわけ、ニューヨーク、フィラデルフィア、ボルチモア、シラキウス、ロチェスターそしてウティカに存在していた。Vgl. Hannes Neumann, *Die deutsche Turnbewegung in der Revolution 1848/49 und in der amerikanischen Emigration*, Schorndorf 1968, S. 143, 145f.
- 59) Perre Arnaud/ André Gounot, Mobilisierung der Körper und republikanische Selbstinszenierung in Frankreich (1789-1889). Anätze zu einer vergleichenden deutsch-französischen Sportgeschichte, in : Etienne Francios u. a. (Hg.), *Nation und Emotion. Deutschland und Frankreich im Vergleich, 19. und 20. Jahrhundert*, Göttingen 1995, S. 300-320, hier S. 312.
- 60) Vgl. *Festschrift*, S. 10, 13; Don Anthony, Rural Roots of the Modern Oympics, in: *Sports International* 6, 1982, S. 36-37, hier S. 37, 並びに、1866年3月の国内オリンピック委員会議事録。in: Hammersley Scrap-Book, Adlershot, held in the A.S.P.T. Museum, Aldershot; 私はウイスター州ドロイトウィッチのフランク・ギヤリガン氏から親切にもこの節を伝えていただいた。
- 61) Sundermann, *Nationalismus*, S. 169.
- 62) ヴィクトリア王朝時代のスポーツ活動に関する概説として、John R. Lowerson, *Sport and English middle classes 1870-1914*, Manchester 1993; Wray Vamplew, *Play up and play the game. Professional Sport in Britain 1875-1914*, Cambridge 1988.
- 63) この概算に関しては、Vamplew, *Play up*, S. 52.
- 64) Vgl. David. L. Chapman, *Sandow the Magnificent. Eugen Sandow and the Beginnings of Bodybuilding*, Urbana u. Chicago, 1994; Michael Anthon Budd, *Heroic Bodies: Physical culture commerce and the promise of the perfected self, 1898-1918*, Ph. D. Thesis Rutgers University New Brunswick NJ 1992. ドイツの展開をめぐる他の視点に関しては、Vgl. Eisenberg, “*English sports*”, S. 255ff.
- 65) Vgl. Panikos Panayi, *The Enemy in Our Midst. German in Britain during the First World War*, New York u. Oxford 1991, S. 281.
- 66) この点に関しては、Eisenberg, “*English sports*”, S. 306f. イギリス連合王国における一般的な政治的背景に関しては、Mariel Grant, *The National Health Compaigns of 1937-38*, in: Derek Fraser (Hg.), *Cities, Class and Communication. Essays in Honour of Asa Briggs*, Hemel Hempstead 1990, S. 216-233.